タントに片づけられるものではない。しかし時には通鑑に用いられた用語を一句求めて、他の研究に役立たせることが大切な場合もある。とくに正史の結晶ともいうべき資治通鑑に於ては、他書との関連の上からみても甚だ有用なことがある。ここに本索引の刊行された意義がある。貝塚茂樹先生の序によれば、この索引は昭和十四年に佐伯富先生をはじめ、同窓生らの手によつて、すでに一応は脱稿されていたのを、昭和二十五年に油印に付した「資治通鑑索引稿」がもとになつている。その後今日まで十年あまり、筆者の手にあつた同書も、講読や研究に日夜つかわれて、赤や青が各処に入り、すでに満身瘡痍の状態になつてきていたのである。また講読をするたびに学生の人から入手の道がないかと聞かれたが、もはやとつくに売切れとかで、早くから各方面より再刊の要望が高まつていたものである。

それが今回ここに装いを新たにし、若干の補訂を加えるとともに、資治通鑑目録、総劃索引、四角號瑪索引を加えて、活版により出刊されたのを見た時、無上の喜びを感じたのは、あえて私一人のみではなかろうと思う。しかも旧版に於てはそのもとづく所の版本に山名本を使用したが、今回は他の四部備要本、伊勢津藩本、及び古籍出版社排印本でも使用できるように、主要版本対照表を付加されたことは、はるかに進歩であると思う。ただ欲をいえば、最も新しい古籍出版社の資治通鑑が、かなり普及している現在、その項目の所在は山名本の所在を示すそれぞれの個所に対応して示された方が、使いやすくまた国際的価値もより高くなつたことと惜しまれる。勿論対照表によつて探し出せるものであるが、索引を利用するという目的の中には、なるべく迅速にその項目を見つけたいという気持があり、ともすれば換算して探すという手間にもどかしさを感ずるものであるから。

本索引の特色は食貨・職官・選挙・兵制などの社会・経済・制度等の名辞に関して、その語の内容をもつともよく説明された個所を主として採つてあることである。平均して山名本の一葉について五項目強の項目が収録されているが、何といつても全二九四巻という大部の中から集めたものであるから、同じ語句が幾つも出てくることは当然であり、これを網羅するにはわずか本索引二三八頁ではとても不足であろう。したがつて個有名詞や一般的な地名はすべて省略してあり、各事項についてもとくに代表的な個所のみに限定されたようであつて、いわば通鑑の事項索引ともいうべきものである。しかし本索引によつて尨大な資治通鑑の精華が自分の掌中に入つたような感がするもので、とくに胡三省の註をも本文同様に見つけ出せることは有難い。かくて中国史にあらわれる主要語句を本索引によつて知ることは、東洋学を専攻する学徒には勿論、日本史家にも稗益すること多大であると信ずるものである。（A5版三二三頁　東洋史研究資料叢刊之三　東洋史研究会発行　八〇〇円）

（間野潜龍）

奈良盆地
最新奈良県地誌

前書は帷子二郎博士の奈良女子大学での定年退官を記念した奈良女子大学地理学教室編の学術的論文集、後書は堀井甚一郎教授の昭和十年出版の同名書の徹底した改訂書であり、ともにわが国古代文化の中心地大和を研究の対象としている。本二書を『史林』に紹

介したい筆者の意図は一つではない。地理学界に紹介したいことはもとよりであるが、もう一つは奈良市や奈良盆地に史蹟をたずね古代文学を研究する人々にせめても地理の書物を一読してほしいと思うからである。というのは生意気な表現かもしれないが、われわれ日本人全体に歴史偏重、地理軽視の傾向が強く、ために人々によつて地理学とは何ぞやの考え方がずいぶん異るからである。例えば万葉地理の概念は国文学をやつた人でなければわからないというのではなく、地理の概念中に地誌的な意義がもう少し考えられてもよいのではないか。こんな書物が出された機会にもう一度歴史や地理、考古学、国文学者、もつと広く都市計画家等の奈良盆地の一隅での会合がのぞまれるのである。

さてまず『奈良盆地』は、編を分つこと三、第一編は献呈さるべき帷子二郎の序説にはじまつて、既往の「盆地の地理学的研究」を回顧した辻田右左男の一文のほか、「気候と災害」や「集落と歴史」、「交通」、「民家」、「方言」を取扱つた概論的論文の七編を収録している。概論的とはいい乍らもとより盆地の民家（千田正美）や災害問題一般（青木滋一）を取扱つた論文は従来とも少く、この点オリジナルな箇所が極めて多い。ついで第二編では土地利用や灌漑水利にはじまる奈良盆地の経済地理学に関する浮田典良以下一〇名による個別的な論文を収録している。その中には早くから発達した農業問題の他に、末尾至行の農村の工業を通じてみられる近代化の問題から、三輪そうめん、大和売薬や郡山金魚、二上山の金剛砂採掘業にいたる地場産業、さては観光産業にも及んでいる。この編は奈良県の将来発展の方向に暗示をあたえる人文地理の重要部門であるが、やや定量的研究へ力が入りすぎ、全体として、もう少し前向きの方向がほしかつたと思われる。第三編は以上の両編を補う田村吉永の「大化前代の代制地割と条里制」や谷岡武雄の「環濠集落」の問題のほかに特定地域の村落に例をとつた樽松静江の「変貌する奈良盆地村落の生態と地域構造」なる社会地理的な分析もみられて、盆地農村のヴィヴィドな生態研究がうかがわれる。これら三つの論文がいずれも問題提起的であるのに対して後半の八人の論文は奈良市以下奈良県下八市についての都市誌の各人による平凡な記載に終つているのがやや物足りなさを感ぜしめる。単なる都市誌に終らせずどこかに焦点を合せた都市地理学の論文であるべきであつた。しかし二十人以上の執筆者による編著でありながら、本書は単なる論文集ではなく、奈良盆地の特性を浮かび出さんとした編者の意図や科学性は充分に買われる。

つぎにほぼ相前後して出版されたもう一つの『最新奈良県地誌』は著者がかつて二六年前に書いた同名の著の改新版であるだけに、今なお老齢に屈せず奈良県各地をめぐり歩く著者の最新の知識が集約されている。この限りにおいて昭和一〇年時の同名書の改訂版だと考えることは出来ない。立派な新書である。そして『奈良盆地』が問題提起の人文地理学書であるならば、この書物はすべての地域に関する問題点をそのままにさらけ出したいわゆる地誌書であるというべきものである。そこには豊富な写真図葉のほか、ざん新な統計がもたらされ、北山山地における電源開発やダム開発の状況等目のあたりに読みとることが出来る。しかも十一章の「地理区とその特性」で終ることは普通一般の地誌書の順序と異らないが、第八章に「総合開発」なる独立した

章を設け、「人口」及び「集落」の項目をその後に廻しているの等は著者なりの戦後の新しい地誌をめざしての心のくばりようであると敬服する。

いま二書を比較し夫々への評者なりの読後の物足りなさをあげけるならば、まず前書にあつては帷子教授の序説の記述が教授が過去三十有余年観察しその研究に没頭された奈良盆地及び大和高原の地形学的研究に言及さるべきだつたと考えるほか、後書においても堀井教授自身の地理学に関する臭味があまりにも少いことで、地誌は誰が書いても同じことだと読者に誤解せしめるおそれのあることである。しかし誰が書いてもというのは老練の地理学者という但書きを必要とする。この場合責任は前書にあつては編者にあり、後者の場合書店の意図にあつて両教授に関係がないといわれて了えばそれまでではある。さあれ古文化財の宝庫である奈良の地にあつて、歴史家や考古学者、建築史家がややもすると、はなやかなジャーナリズムにうけてきた間にまじつて、地道な地理学一本の道を旦々と歩んで来られた両教授へ敬意を表するとともにこの二書がともにカップルになつて、今後はじめにあげたように、多くの隣接学科の人々からも読まれ、批判されることを願うものである。

（『奈良盆地』　A5版　三九八頁　昭和三六年　古今書院発行　定価一、〇〇〇円
『奈良県地誌』　A5版　四六九頁　同年　大和史蹟研究会発行　二、〇〇〇円）

（藤岡謙二郎）

学界消息

史学研究会関係

七月例会
七月一日（土）午後一時より　於楽友会館
ルネサンス末期の知識人　永井三明氏
長岡宮跡の発掘　福山敏男氏
（スライド使用）

十月例会
十月七日（土）午後一時より　於楽友会館
アメリカ歴史学界の現状　今津晃氏
―ヴィスコンシン大学に学んで―

国史関係

読史会　九月例会
九月九日（土）午後一時より　於京大陳列館演習室
幕末期甲府生糸商について　有泉貞夫氏
初祖と二祖　石田善人氏
―時宗史にかんする一・二の問題―

東洋史関係

旧制大学院会例会
九月九日（土）午後二時　陳列館会議室
明代監生の出仕について　谷光隆

新制大学院会例会
九月一五日（金）午前十時　陳列館演習室
清代の商業について　狭間直樹

京都大学人文科学研究所夏期公開講座
中国の古典
八月一日　林巳奈夫
周礼　貝塚茂樹
論語
八月二日　平岡武夫
白氏文集
元朝秘史　岩村忍
八月三日
大同書　小野川秀美